

山梨県立文学館 館報

1989(平成元)年
11月 創刊

第101号



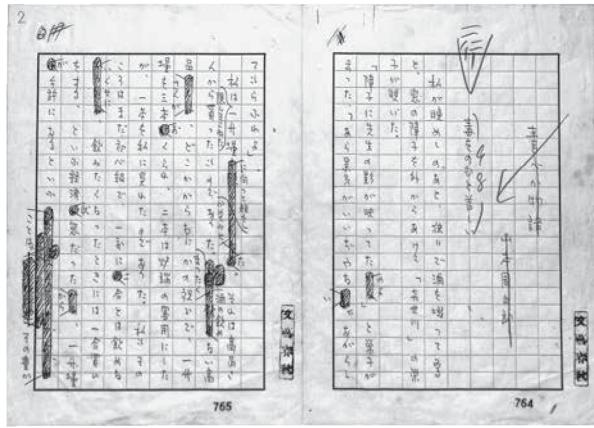
2 周五郎への測鉛 齋藤慎爾
 3 特設展「歿後五十年 山本周五郎展」
 4 展示資料より
 5 館からのご案内
 6 教育普及事業報告
 7 第二十五回 やまなし文学賞結果
 8 館の日誌 利用のご案内

特設展

「歿後五十年 山本周五郎展」開催

平成二十九年四月二十九日(土・祝)〜六月十八日(日)

庶民の哀感や封建社会に生きる人々の苦悩をあたたかい眼差しと洞察力で描いた山本周五郎は、一九〇三(明治三十六)年六月二十二日、大月市初狩町に生まれた。本名は清水三十六。原籍地は山梨県韮崎市大草町。一九〇七年八月に豪雨による山津波が大月市を含む北都留一帯を



「青べか物語 毒をのむと苦しい」原稿 当館蔵

襲い、被災した一家は東京に移転する。周五郎は現在の横浜市立西前小学校を卒業後、東京・木挽町の質屋「きねや」山本周五郎商店に徒弟として住み込む。筆名は、この店主の名前に由来する。

一九二六年四月、「文藝春秋」に「須磨寺附近」を発表し、本作は出世作となる。一方で一九四三年、第十七回直木賞に『小説日本婦道記』が推されたが辞退、その後も多くの賞を固辞した。戦後、「樅ノ木は残った」「赤ひげ診療譚」「さぶ」などの作品で多くの読者を獲得し、これらは、映画化・舞台化されている。

甲州を舞台にした作品としては、山県大式が主人公の「明和絵巻」、武田家再興の物語「山彦乙女」などがある。本展では、代表作「青べか物語」や「おさん」、絶筆となった「おごそかな湯き」の原稿をはじめ、映画や舞台のポスターや台本など約八十点の資料により、山本周五郎の文学の世界を紹介する。

関連イベント

○名作映画鑑賞会「定員500名」

・5月14日(日)「樅三十郎」

原作 山本周五郎「日日平安」

監督 黒澤明 一九六二年 東宝

・6月10日(土)「青葉城の鬼」

原作 山本周五郎「樅ノ木は残った」

監督 三隅研次 一九六二年 大映

いずれも上映午後1時30分、会場 講堂

※申込不要。入場無料。当日、定員を超えた場合は、それ以降の入場をお断りすることがあります。

○文学講座「定員150名」

「手紙に見る周五郎の心情」

5月21日(日)午後2時、

講師 保坂雅子(当館学芸課長)

会場 研修室

※お電話か当館受付でお申し込みください。受講無料。

○ワークショップ「定員15名」

「ペーパークイリングで風鈴を飾ろう!」周五郎が描いた江戸の暮らしをイメージして〜

6月4日(日)午後1時30分、

講師 佐々木綾子(ペーパークイリング作家)

対象 小学校四年生以上

材料費 500円

会場 研修室

※お電話か当館受付でお申し込みください。

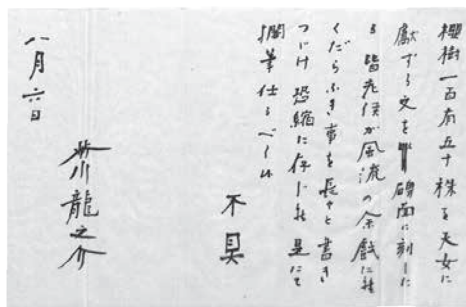
さい。

「新収蔵品展 直筆に見る作家のリアル」開催中(観覧無料)

3月20日(月・祝)まで

平成二十八年に収蔵した資料を中心に約一〇〇点を展示する。

東京帝国大学在学中の芥川龍之介が第一高等学校時代の恩師・菅虎雄にあてた書簡(写真)には、千葉県一宮で夏休みを過ごす際に見聞きしたことなどが記される。また、文壇パー「みち草」関連の資料として、店を訪れた井伏鱒二、草野心平らの書画を紹介する。このほか甲州市出身で三〇〇本以上の脚本を手がけた竹内勇太郎の直筆資料を展示。飯田蛇笏・飯田龍太の句幅、太宰治の葉書なども展示する。



芥川龍之介 菅虎雄あて書簡(部分)
1914(大正3)年8月6日

周五郎への測金

山本周五郎の『その木戸を通過』に出会ったのは、学生時代の、それも最も苦しい時期である。当時、私は学生運動からの挫折と同時併行的に起こった人間関係の躓きにより、殆んど進退窮まるという状況にあった。天啓の如く『その木戸を通過』が降臨し、私は救われたのである。

作品の大まかな筋は次のようなものである。侍の平松正四郎の所に、ある日、ひとりの過去(記憶)を失った若い女が訪ねて来て、そのまま居ついてしまう。そのため正四郎は家老の娘との婚約も破談になる。女は誰からも愛され、やがて正四郎の妻となる。すべてがうまくいき、平穏な日々が続く。だが三年後のある日、女は子供を庭に残し、そのまま来た時と同じように、木戸を通過して姿を消してしまう……。

斎藤真雨

周五郎の所謂「不思議小説」として世評は定着していたが、そう称されることに内心、激しい違和を覚えたことも事実である。「不思議」などといった次元で形容されるものではないという反発である。自分の身に現に生起している切実な事件であった。

「来たときの様に、いつてしまったのだな、ふさ」と彼は囁いた。「いまだこにいるんだ、どこでなにをしているんだ」(略)喉へ嗚咽がこみあげた。彼はむせび泣いた。は、そのまま自画像であった。半世紀を閲した今でも頁を繰り、この箇所にくると、涙滂沱、読み進めることが出来ない。些末な経験でも錬成されると(原体験)に結実する。もはや忘却は不可能になるのではなからうか。

後年、奄美大島で、『死の棘』の作者

島尾敏雄氏から特攻震洋隊の体験を話され、「僕はいまだに復員したとは思っていません」と眩やかれ胸をつかれたことがある。氏と同じ戦中派世代の吉本隆明氏から、「自分の内部では、戦争は終わるところか通過したとすら言えない」との述懐も聞いている。私の失愛体験を出すのは鳥潜おこがましい限りかもしれないが、体験において同等と思っている。読む側の精神の成長に比例して巨大

になっていく作品——『その木戸を通過』が、正にそうである。汗牛充棟、徒ならぬ作品論のなかで、私が最も影響されたのは、上野瞭氏の論考である。氏はルイス・キャロルの『ふしぎの国のアリス』やフィリパ・ピアスの『トムは真夜中の庭で』、C・S・ルイスの『ナルニア国シリーズ』といったファンタジーの系譜を取り上げて、『その木戸を通過』との違いを記述する。

木戸＝通路の向う側は西欧では、この日常の現実界とは別のネバーランド(決して存在しない国)である。精神の一種の解放区とされる。わが国では非日常の異界・異郷、他界、常世、黄泉、根の国といわれる。木戸を潜り、正四郎の妻は異界へと逃れた……私の思考は当時、そこで停止された。画期的なのが上野瞭氏の「読み」であった。

木戸を潜り抜けて、正四郎の日常生活に入り込んで来たとき、彼女がすでに傷ついていたということは、木戸の向うにあった世界には、彼女を記憶喪失に追い込むような苛酷な現実生活が在ったことを意味する。つまり異界は現世の現実や観念の反映である以上、私たちの「生活空間」との往還としてある。日常からもうひとつの日常への移行。「女は自分を苛んだ苦痛の世界に戻るだけだ」と言うのである。

私の今の考えは上野理論に漱石が「帰って来た人間」という命題を抜き出した『道草』を重ねる所にある。「帰って来た人間」とは、他者の発見、生活者の孤独、その闘いの意識化を意味する。他人と他者は違う。自分と同一の地平に下り立ったとき、誰もが日常生活に堪え、孤独な戦いを戦う以外のどんな術もないことを知る。自殺するか？否。狂死するか？否。宗教に逃れるか？否。漱石は三つの道のいずれをも拒否し、現実には踏みとどまる。異界へ逃れることは、もはや出来ない。周五郎は、ストリンダベリの箴言を座右の銘にした。曰く「苦しみ働け、常に苦しみつつ常に希望を抱け、永久の定住を望むな。この世は巡礼である」。

(俳人・深夜叢書社主宰)

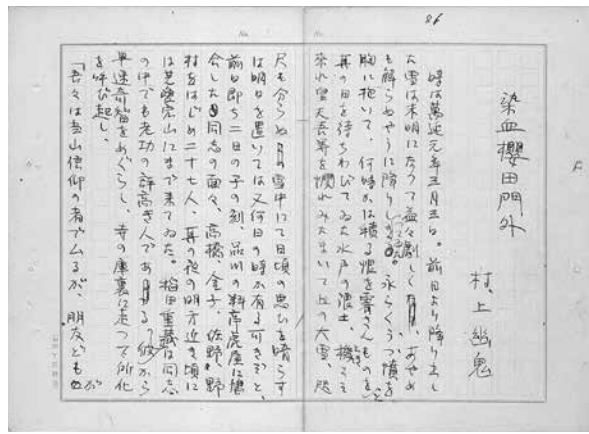
■特設展

「歿後五十年 山本周五郎展」

展示資料より

①村上幽鬼「染血桜田門外」草稿

当館蔵



村上幽鬼「染血桜田門外」草稿

物心両面から援助を受けた質店山本周五郎商店の主人の名に因んでつけられた筆名によって、一九二六(大正十五)年四月「須磨寺附近」が「文藝春秋」第四巻第四号に掲載され、文壇に登場したが、一方で「俵屋宗八」「清水きよし」などの筆名で「少女世界」等の雑誌に作品を発表していた。本草稿の筆名「村上幽鬼」もその一つと思われる。赤色野線の「10

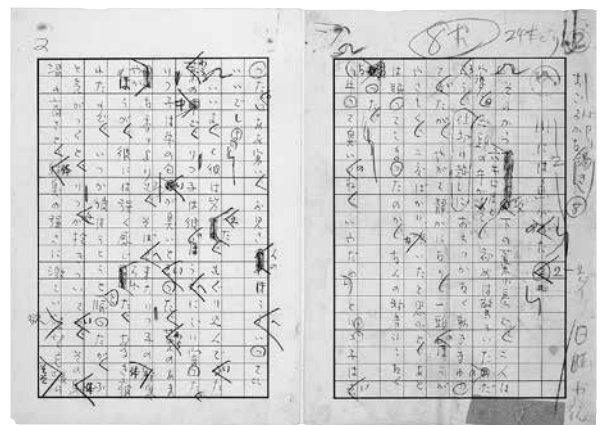
20 YN特製」と印刷された四〇〇字詰原稿用紙を使用し、末尾に「(一九二七・四・一九・)と書かれている。

本作は、大老井伊直弼襲撃の前日から、宿望を遂げ、自決するまでの水戸浪士のはたらきを描いている。山本周五郎の研究・評論を数多く著している木村久邇典は、全集未収録の本作が収められた新潮文庫『怒らぬ慶之助』(一九九九年九月)巻末解説に、「手書きの同人誌に執筆した作品」で「たまたま演出家小池章太郎氏によって発見」されたと記している。この他、初期の作品として「其の頃の彼」
「或る男女の話」や詩「五月の野邊」などの草稿も展示する。

②山本周五郎「おごそかな湯き」原稿

当館蔵

宗教と信仰の問題に挑んだ現代小説で、一九六七(昭和四十二)年一月八日から二月二十六日の「朝日新聞」日曜版に八回分が掲載されたが、二月十四日午前七時十分、仕事場に行っていた横浜市中区の旅館間門園の離れで心臓衰弱および肝硬変により死去したため中絶。晩年秘書をつとめた齋藤博子の『間門園日記』山本周五郎ご夫妻とともに「二〇一〇年五



絶筆となった「おごそかな湯き」第8回原稿

月深夜叢書社)によると一九六六年十一月十一日に執筆を開始、十一月二十八日には第二回分を書き上げ、翌日には第三回にとりかかっている。本作担当記者の門馬義久は二月十五日の「朝日新聞」で、二月十三日の朝十一時頃、第八回の原稿を受け取りに行ったが、「原稿はできてない。かんべんしてくれ。二、三日ねむれない。腹はへつてるんだが食欲が全くない」と泣きそうな顔をしていた」と亡くなる前日の様子を伝えている。

③山梨県立塩山商業高等学校文芸部誌

「扇状地」第十号

当館蔵



表紙の「1967」は誤りで、一九六八(昭和四十三)年三月一日発行、編集兼発行人は山梨県立塩山商業高等学校文芸部。本誌収録の文芸部による「共同研究 山本周五郎の出生地をめぐって」は、山本周五郎生前に講談社から刊行された『山本周五郎全集』(一九六三〜六四年 全十三巻)第八巻収録「著者年譜」(木村久邇典作製)の出生地が「山梨県北巨摩郡大草村若尾(現在は韮崎市大草町)」とあるのに対し、周五郎の生家清水家の戸籍や清水家が初狩で住んでいた長屋の家主奥脇家の現当主奥脇賢吾への取材により、実際は「北都留郡初狩村八十二番戸」であることを明らかにしている。

文芸部から本誌を送られた木村は、この調査を『山本周五郎小説全集』の月報十七、十八(一九六八年九、十月)の年譜(尾崎秀樹編)に反映、文芸部の調査内容とその後、みずから初狩と韮崎を訪れた様子を月報二十一、二十二、二十三(一九六九年一、二、三月)に報告した。(学芸課 保坂雅子)

閲覧室より

書庫見学について

文学館の書庫見学は閲覧室の役割をご理解いただくため、平成十三年から行われています。近年は春と秋の年二回実施しています。今年度は六月十一日(土)と十一月二十日(日)に実施しました。十一月二十日は県民の日で、展示室の入館料も無料となるため、家族連れのお客様なども多く来館されました。今年度は日曜日と重なり、指定管理者の主催事業であるマルシェ「ミューゼ・カフェ」が開催されたこともあり、紅葉の木々に囲まれた文学館前のさんさん広場は大勢の人で賑わいました。このような中、書庫見学にも多くの方が参加してくださいました。そこで見ていただいた内容の一部をご紹介します。

閲覧室のカウンター裏にある書庫の内部は一階と二階に分かれ、一階は図書が約十一万冊、二階には雑誌・新聞や視聴覚資料など約二十一万冊、計三十二万冊が保管されています。書庫に入る時は入口でスリッパに履き替え、粘着マットを踏んでちりやほこりをシャットアウト

します。書庫内の温度は二十三度前後、湿度は五十五パーセント前後に一定に保たれ、資料の灼けを防ぐ紫外線カットの蛍光灯を使用するなど、資料に適した保存環境が維持されています。本の害虫やカビ菌を殺菌するための燻蒸作業や所蔵の確認のための蔵書点検も計画的に行われています。

一階の図書は、図書館で使用する日本十進分類法を用いて近代作家のまとまりをつくる排架方法をとっています。図書には、蔵書を管理するためのバーコードラベルが本の目立たない位置に、置き場所を表す背ラベルが透明カバーの上貼つてあります。古い資料や貴重なサイン本などは酸性化を抑える中性紙封筒に入れるなどして保護しています。

二階には雑誌がタイトルの五十音順に並んでいます。傷みのある資料や特に貴重な資料は、保護のために中性紙封筒やカバーを使用したり、薄い刊行物はファイルに入れたりするなどして、資料の状態に応じた整理をしています。

この膨大な書庫の蔵書の中から、貴重な図書や珍しい雑誌など興味をもっていただけそうな資料を選び出し、解説を行いました。

日々新たに購入したり、皆さまに寄贈いただいた資料はそれぞれ蔵書の間に組み込まれ、充実してきました。表からはほとんどわからないため、書庫に入ると、皆さん、その量に驚かれ、声をあげられます。興味のある方はぜひ次の書庫見学にお越しください。また、書庫にある蔵書のほとんどが閲覧可能です。新緑や紅葉の芸術の森を臨む閲覧席で目の保養をしながらゆつくりと読書はいかがでしょうか。

(資料情報課 水上百合子)



「寄贈資料より」

(平成二十八年八月～二十九年一月)

- 渡邊富孝氏より渡邊富孝著「悠久の街・甲府」原稿コピー、図書一点。
- 市川孝次氏より宮沢賢治著「塵点の劫を過ぎています」この妙のみ法にあひまつりしを「拓本印刷」。
- 野北朝美氏より前田晁「石と雨」原稿など三六一点、図書六點、雑誌二二五點。
- 奥脇勝典氏より飯田蛇笏「芋の露連山影を正うす」句碑拓本など二點。
- 渡邊洋子氏より佐藤佐太郎「ある時は日のまともにて白梅の最勝の白しほし輝く」色紙など二點。
- 藤岡武雄氏「日本歌人集」レコード。
- 望月詩史氏より「二七会とその人々」抜き刷り。
- 齋藤博子氏より山本周五郎専用原稿用紙。
- 石川博氏より津島美知子書簡五點。
- 扶桑書房より「どくとるマンボウ追想記」装丁原画一式など二點。
- 学習院大学史料館より「辻邦生」パリの「隠者展」パンフレットなど二點、図書一点。
- 齋藤喜美子氏より北杜夫原稿用紙ほか図書二二點、雑誌一点。
- 村松定史氏より河西豊太郎書簡など特殊資料二九點、図書一点。
- 今川徳三氏より結城昌治書簡四點、図書二點。
- 横川翔氏より「松田福松の足跡 三井甲之とその同志たちの一側面」抜き刷り一点、雑誌一点。

館からのご案内

■教育普及事業

※各企画・講座とも参加・受講無料

○年間文学講座「定員500名」

・講座1「甲州地誌『裏見寒話』—甲州の伝説をよむ」(全八回)

講師 長谷川千秋(山梨大学准教授)

5月27日(土) 『裏見寒話』から山梨のことばと文化をよむ

6月24日(土) 『石のいわれ—勝沼萬福寺の等々力石(馬蹄石)と怪異石』

・講座2「教科書に載った児童文学とその作家たち」(全八回)

講師 牛山恵(都留文科大学名誉教授)

5月11日(木) 「浜田広介 「ひろすけ童話」の世界—「泣いた赤おに」・「椋鳥の夢」

6月8日(木) 「佐野洋子 生きる」との意味を問う物語—「おじさんのかさ」・「一〇〇万回生きたねこ」

・いずれも午後2時〜 会場 講堂

※お電話か当館受付でお申し込みください。

※平成二十九年度の年間文学講座、名作映画鑑賞会の年間予定は、チラシまたは4月以降の当館ホームページをご覧ください。

○初夏の文学創作教室

・「三枝浩樹 初心者短歌教室」

山梨歌人協会会長の三枝浩樹氏を講師に、今年も初心者対象の短歌の連続講座を実施します。

開催日

第一回 5月13日(土) 講義

第二回 6月3日(土) 実作

第三回 6月17日(土) 歌会

会場 研修室

定員20名(全回出席できる方)

※要申込。往復はがきに①郵便番号②住所③氏名・ふりがな④電話番号を明記し、当館までお申し込みください。

申込締切4月14日(金)必着

○読書会

5月7日(日) 山本周五郎著「あんなちゃん」

6月11日(日) 太宰治著「晩年」

いずれも午後2時〜4時

※お電話か葉書で(氏名・電話番号を明記の上)お申し込みください。

■展示室

常設展

○第一〜四室展示替え

樋口一葉、芥川龍之介、飯田蛇笏など山梨県出身・ゆかりの作家を紹介する各コーナーの展示替えとともに、第一室で期間限定の資料展示を以下のとおり行います。

・春の常設展

推理小説の開拓者 木々高太郎 生

誕一〇〇年

3月22日(水)〜6月4日(日)

・夏の常設展

夏目漱石 生誕一五〇年企画

漱石とミレ

6月6日(火)〜7月17日(月・祝)

漱石と樋口五葉

7月19日(水)〜8月27日(日)

○第五室の展示替え

山梨出身・ゆかりの文学者104名を二期に分けて展示

・詩・短歌・俳句・川柳・漢詩

・3月20日(月・祝)

・小説・評論・随筆・翻訳・ジャーナリズム・戯曲・脚本・童話・童謡

4月29日(土・祝)〜9月3日(日)

※第五室は3月21日(火)〜4月28日(金)は休室します。

■閲覧室

○閲覧室資料紹介

・「芥川賞・直木賞の小説を味わう」
2月10日(金)〜4月9日(日)

・「山本周五郎を読む」
4月29日(土・祝)〜6月18日(日)

○文学者の誕生日にちなんだ資料紹介

・「李良枝(3月15日生まれ)」
3月10日(金)〜3月23日(木)

・「土橋治重(4月25日生まれ)」
4月14日(金)〜4月27日(木)

・「太宰治(6月19日生まれ)」
6月9日(金)〜6月22日(木)

次の皆様からも図書・雑誌を寄贈いただきました。(敬称略)

秋元 千恵子 芦澤 紗知子

雨宮 清子 石原 武

石割 透 一瀬 公弘

植松 光宏 白井 和恵

大下 一真 大野 とくよ

岡井 隆 加倉井 厚夫

角川 春樹 金森 直治

川手 千興 橋田 活子

窪田 治美 こまつ かん

小山 弘明 三枝 ゆり子

斎藤 芳弘 坂本 宮尾

佐藤 真樹 佐藤 真佐子

佐野 秀延 清水 蒼生

千田 佳代 宗田 安正

たか おさむ 高橋 真理子

武田 信枝 田中 政子

飛田 則雄 中島 国彦

長島 裕子 中田 水光

中村 吾郎 布川 欣一

萩生田 浩 秦 恒平

平松 伴子 備仲 臣道

藤 英樹 藤岡 武雄

松田 遥 的場 信輝

三島 利徳 水木 亮
向山 三樹 村田 馨
森田 進 安水 稔和
槍田 良枝 渡辺 えり

この他に団体の方々からも寄贈いただいております。

■教育普及事業報告

◇北杜夫展関連事業

企画展「北杜夫展 ユーモアがあるのは人間だけです」会期中に次の四事業を行った。

10月1日(土)に、北杜夫の長女でエッセイストの齋藤由香氏の講演会「どくとるマンボウ家のてんやわんや」を開催、北杜夫の躁鬱病発症による齋藤家の混乱をユーモアを交えながらお話ししていただいた。

齋藤家からは、11月3日(木・祝)に北杜夫夫人の齋藤喜美子氏にもお越しいただき、三枝館長と「北杜夫は三人いましたー喜美子夫人が語る波乱の50年」というテーマでトークイベントを行った。躁病時、鬱病時、安定時、それぞれの北杜夫を知る夫人が、ハンブルグでの出逢いから晩年までを、写真と貴重な証言で振り返った。

また、10月30日(日)には早稲田大学教授の石原千秋氏による「北杜夫とどくとるマンボウ 二人で一人」と題した講演会を実施、みずからの読書体験とともに作品評価の現状を語った。

当館職員の事業として、9月25日(土)に学芸課長の保坂雅子による講座「これは必見！展示資料から」を開講し、松本高等学校時代のノートや父である齋藤茂吉からの書簡などの資料につ

いて解説した。

◇文学創作教室

三枝館長・三枝浩樹氏による短歌講座 9月8日(木)と11月26日(土)、短歌経験者のレベルアップを目的として、短歌講座を行った。二つの講座はそれぞれ単独で募集を行い、9月は三枝昂之当館館長、11月は三枝浩樹氏(「沃野」代表)が講師を担当した。

9月は一般60名、11月は一般27名、高校生13名の計40名が参加した。

前半は短歌の詠み方に關する講義、後半は事前に参加者が提出した歌を講師が批評する形で進められた。参加者からは「批評してもらって大変勉強になった」「今後の創作活動においてますますやる気が出てきた」といった声が寄せられた。



◇出前授業 12月14日(水)、早川北小学校で出前授業を行った。

三・四年生の四人と、先生方とともにことばのゲームをした後に、一人二句、俳句を作った。クリスマスや冬休みなど、この時期ならではの句が完成した。



◇平成28年度の主な博学連携事業

・移動文学館(掲載は貸出順)

「石川啄木等身大パネルセット」
 歙沢中学校・増穂中学校(計2校)
 「飯田蛇笏・龍太ちまちな人形セット」
 御坂西小学校・浅川中学校・石和東小学校・石和中学校・身延中学校・境川小学校・都留高校・富士見小学校・早川北小学校(計9校)

「村岡花子と「赤毛のアン」セット」
 竜王西小学校・田富中学校・中央高校・島田小学校・富竹中学校・甲府東小学校(計6校)

「宮沢賢治イーハトーブの世界セット」
 北東中学校・甲府東小学校・増穂南小学校・下部小学校・大國小学校・西島小学校・奥野田小学校・中央高校・泉小学校・田富中学校・貢川小学校・八代小学校・増穂小学校・一宮西小学校・早川南小学校(15校)

・出前授業
 増穂中学校・石和中学校・甲府東小学

校(2)・早川北小学校・都留高校・早川南小学校(計7回)

・出前講座

峡南地区学校図書館教育研究会・中巨摩地区学校図書館教育研究会(計2回)

・その他

7月27日(水)に総合教育センターとの共催で、能楽師の佐久間二郎氏を講師に「能楽を知ろう」を行った。

11月18日(金)には「文学館の魅力活用研修 初任者研修」を行った。講義、常設展および書庫見学を経て、文学館を学校教育でどう活用するか、グループごとにプレゼンテーションを実施し、アイデアを交流した。

・来館実績

南部中学校・増穂中学校・歙沢中学校
 上野原高校・竜王北中学校・長坂中学校・葎崎西中学校・須玉中学校・葎崎東中学校・石和こすもす教室・普通土学園・田富中学校・竜王中学校・白根巨摩中学校・甲西中学校・上野原中学校・早稲田高等学院・玉穂中学校・櫛形中学校・双葉中学校・城西高校・葎崎こすもす教室・東桂中学校・押原中学校・若草中学校・山中湖中学校・新田小学校・甲府北東中学校・中央高校・大和中学校・都留高校・駿台甲府高校・共立女子中学校・甲府あすなろ学級・塩山高校・北杜高校・高校文化連盟茶道部・甲府昭和高校(計38校50回 掲載は来館順)

樋口一葉記念

第二十五回やまなし文学賞結果

一、応募状況

本文学賞は、山梨県と深いゆかりを持つ樋口一葉の生誕百二十年を記念して、平成四年に制定された。山梨県の文学振興と、日本の文化発展を図り、今回も小説募集と研究・評論の推薦を受ける二部門で実施した。選考委員は小説部門が坂上弘・佐伯一麦・長野まゆみ、研究・評論部門は、中島国彦・関川夏央・兵藤裕己の各氏。

小説部門の応募作品数は、三〇〇編。うち男性は二二七編、女性七三編。山梨県内からは二五編だった。

研究・評論部門の推薦延数は一一八編。うち自薦が一二編(単行本一〇冊 雑誌掲載二編)、他薦が一〇六編(単行本一〇六冊)だった。

二、選考結果

選考会は、研究・評論部門を二月十三日に、小説部門を二月十六日に學士會館でそれぞれ行い、受賞作を決定した。選考結果の発表を、三月二日午後三時に行った。

小説部門のやまなし文学賞には百万円、同佳作二編には各三十万円、研究・

評論部門のやまなし文学賞二編には各五十万円の賞金が贈られる。

また、小説部門の三編は山梨日日新聞紙上及び同紙電子版に掲載、やまなし文学賞「エンディングノート」は単行本として刊行する。

◆受賞作品◆

小説部門

□やまなし文学賞

・「エンディングノート」

大山 ちこ氏 (東京都在住)

「受賞の言葉」

作品を選んでくださった皆様、これからお世話になる皆様、本当にありがとうございます。

作品を応募してから、もし賞をとったらどうなるんだろうと楽しく想像していました。でも、いざ現実になってみると「表彰式」「取材」「書籍化」など今まで縁のなかった華やかな言葉に「どうしよう!」と圧倒されるばかり。出不精にもかかわらず、電車で遠出したりして気を紛らわせています。

書き上げた当初は、応募した作品の倍はある長さのお話でした。ところが急に思い立って文章を削りに削り、あれこれ修正しながらどうにか話を繋いで、出来上がってみれば枚数も締め切りもギリギリ。出勤前に慌てて郵便局に走ったこ

とを覚えています。受賞の連絡をいただき、先日改めて作品を開いてみたのですが、格好をつけた言い回しが恥ずかしく、ほとんど読み返すことが出来ませんでした。これをたくさんの方に読まれてしまうとは、たまたまなく心許ない思いです。けれど二度とないような経験をさせて頂くのですから、できる限り楽しみたいと思いますし、ほとぼりが冷めたころに「実はね」と友人などに自慢してやろうと、いそいそ目論んでいるところです。

□やまなし文学賞佳作

・「菓子折り」

鈴木 篤夫氏 (福島県在住)

・「まいぺえら」

小池 映二氏 (山梨県在住)

研究評論部門

□やまなし文学賞

・吉田 昌志

『泉鏡花素描』(二〇一六年七月 和泉書院)

(略歴)

青山学院大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。昭和女子大学大学院教授。神奈川県在住。

福嶋 亮大
『厄介な遺産 日本近代文学と演劇』

的想像力』(二〇一六年八月 青土社)

(略歴) 京都大学大学院文学研究科博士課程修了。立教大学文学部助教。東京都在住。

■「資料と研究」第二十二輯目次

A5判一二二頁・三月下旬発行

・棄民か侵略か―北杜夫『輝ける碧き空の下で』 石原 千秋

・歌人北杜夫の世界 三枝 昂之

・望月市恵・保高德蔵・なだいなだ・山川方夫 北杜夫宛書簡 翻刻 保坂 雅子

・飯田蛇笏 高室具龍宛書簡 翻刻 一九二九(昭和四)年 高室 有子・中野 和子

・田中冬二宛書簡『海の見える石段』ほか 献本に対する礼状 翻刻 伊藤 夏穂

・芥川俊清『書留』抄録』と芥川家に 関係すると思われる文書目録 中村 章彦

・中村星湖作成スクラップブック②⑤ その五 飯沼 典子・水上百合子

飯沼 典子・水上百合子

館 の 日 誌

- 9・15(木) 年間文学講座Ⅱ「子どもが出会う賢治童話―「やまなし」「雪渡り」など
講師 牛山 恵(都留文科大学名誉教授)
- 9・16(金) 企画展「北杜夫展 ユーモアがあるのは人間だけです」レセプション
閲覧室資料紹介「マンボウ先生の作品たち―北杜夫の世界―」(～11・23)
- 9・17(土) 企画展「北杜夫展 ユーモアがあるのは人間だけです」開始～11・23(水・祝)
年間文学講座Ⅰ「甲州の文化・こころを伝える―『裏見寒話』の世界 柳の恋―善光寺の棟木」
講師 長谷川千秋(山梨大学准教授)
- 9・18(日) 名作映画鑑賞会「残菊物語」
- 9・19(月・祝) 茶室「素心菴」にて呈茶
- 9・25(日) 企画展関連講座「これは必見！展示資料から」
講師 保坂雅子(当館学芸課長)
- 9・28(水) 甲府東小学校出前授業(「賢治と嘉内」)
- 10・1(土) 企画展関連講演会「どくとるマンボウ家のでんやわんや」
講師 齋藤由香(エッセイスト、北杜夫長女)
- 10・2(日) 第6回読書会
- 10・13(木) 年間文学講座Ⅱ「賢治童話に描かれる悪―『猫の事務所』『土神と狐』など」
講師 牛山 恵(都留文科大学名誉教授)
- 10・15(土) 飯田蛇笏・龍太碑前祭
- 10・16(日) 名作映画鑑賞会「道～白磁の人」
- 10・22(土) 年間文学講座Ⅰ「甲州の文化・こころを伝える―『裏見寒話』の世界 塩澤寺の石芋」
講師 長谷川千秋(山梨大学准教授)
- 10・23(日) 茶室「素心菴」にて呈茶
- 10・25(火) 教師のための学習会
- 10・27(木) 年間文学講座Ⅲ「近世甲斐の国学者 萩原元克―著作と館蔵資料から」
講師 伊藤夏穂(当館学芸員)
- 10・30(日) 企画展関連講演会「北杜夫とどくとるマンボウ、二人で一人」
講師 石原千秋(早稲田大学教授)
- 11・3(木・祝) 企画展関連トーク「北杜夫は3人いました―喜美子夫人が語る波乱の50年」
語り手 齋藤喜美子(北杜夫夫人)
聞き手 三枝昂之(当館館長)
- 11・5(土) 茶室「素心菴」にて呈茶
- 11・10(木) 年間文学講座Ⅱ「生命の宇宙を旅する二人―『銀河鉄道の夜』」
講師 牛山 恵(都留文科大学名誉教授)
- 11・12(土) 年間文学講座Ⅰ「甲州の文化・こころを伝える―『裏見寒話』の世界 大蛇になった姫君―身延山図経」
講師 長谷川千秋(山梨大学准教授)
- 11・13(日) 第7回読書会
- 11・16(水) 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「石原八束」(～12・8)
- 11・18(金) 教育センター共催事業 初任者研修
書庫見学
- 11・20(日) 名作映画鑑賞会「彼岸花」
茶室「素心菴」にて呈茶
- 11・26(土) 文学創作教室「三枝浩樹短歌講座」
- 12・8(木) 年間文学講座Ⅱ「雨ニモマケズ」を生きた男―宮沢賢治の生涯」
講師 牛山 恵(都留文科大学名誉教授)
- 12・11(日) 第8回読書会
- 12・15(木) 年間文学講座Ⅲ「山梨の文学 笛吹の文学」
講師 梶原宣仁(当館教育主事)
- 12・17(土) 年間文学講座Ⅰ「甲州の文化・こころを伝える―『裏見寒話』の世界 近世の甲州のこころと文化―『裏見寒話』の成立背景」
講師 長谷川千秋(山梨大学准教授)
- 1・8(日) 新春百人一首ワークショップ
講師 清水章子(竜王かるた会)
- 1・9(月・祝) 茶室「素心菴」にて呈茶
- 1・21(土) 「新収蔵品展 直筆に見る作家のリアル」開始(～3・20)
- 1・22(日) 第9回読書会
- 1・27(金) 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「檀一雄」(～2・8)
- 1・28(土) 全国文学館協議会共同展示「3.11 文学館からのメッセージ」常設展・飯田蛇笏コーナー「関東大震災と俳誌「雲母」」(～3・20)
- 2・10(金) 閲覧室資料紹介「芥川賞・直木賞の小説を味わう」(～4・9)
- 2・12(日) 第10回読書会
- 3・5(日) 第11回読書会

利用のご案内

■開館時間

- 展示室 9:00～17:00 (入室は16:30まで)
- 閲覧室・研究室 9:00～19:00 (土・日・祝日は18:00まで)
- 講堂・研修室 9:00～21:00
- 茶室 9:00～21:00 (準備・片付けの時間も含まれます)
- ミュージアムショップ 9:30～16:20

■休館日(4月～6月)

- 4月3・10・17・24日
- 5月8・15・22・29日
- 6月5・12・19・26日

■常設展観覧料

	個人	団体 (20名以上)	美術館 共通券
一般	320円	250円	670円
大学生	210円	170円	340円

※65歳以上の方(企画展は県内在住者のみ)、障害者手帳をご持参の方と介護の方1名、並びに高校生以下の児童・生徒の観覧料は無料です。

■年間フリーパスポート(定期観覧券)のご案内

文学館常設展・企画展を1年間何回でも観覧できる年間フリーパスポート(定期観覧券)を販売しています。
料金は、一般1,540円、大学生770円です。

■県内宿泊施設利用者割引のご案内

山梨県内の宿泊施設へ宿泊または宿泊予約された方で、宿泊当日または翌日に観覧される場合、個人でも団体料金でご観覧いただけます。宿泊(予定)を証明するもの(領収書・予約クーポン券等)を窓口へ提示してください。なお20名様

以上の団体は対象になりません。

■施設利用のお申し込みについて

○講堂・研修室・研究室・茶室の申込みは、使用しようとする日の6ヶ月前から原則として10日前までです。

☆いずれも休館日は受け付けません。使用上の注意は申込の際、ご説明いたします。

■平成29年度山梨県立文学館友会の会員募集のご案内

「友の会」では、文学館多くの皆様に利用していただくため、当館が行う文学イベント等の情報を提供しています。申込締切は特にありませんが、資格を有する期間は平成29年4月1日から、翌年3月31日までです。年会費は1,000円です。詳細は文学館内「友の会」事務局までお問い合わせください。

山梨県立文学館 館報 第101号

平成29年3月10日発行

編集兼
発行人 三枝 昂之

発行所 山梨県立文学館

〒400-0065

山梨県甲府市貢川一丁目5-35

☎ 055(235)8080 FAX 055(226)9032

<http://www.bungakukan.pref.yamanashi.jp/>

※紙面の無断転載はお断りします。